

Title	第4回 京都大学-慶應義塾大学グローバルCOE共催シンポジウム： 「トランスナショナルな心・人・社会」参加報告（1月9日 京都大学時計台記念館2階 国際交流ホールI&II）
Sub Title	Kyoto university and Keio university hosted a joint symposium on "Transnational mind, human, and society"
Author	佐治, 伸郎(Saji, Noburo)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2011
Jtitle	Newsletter Vol.15, (2011. 3) ,p.2- 2
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	第4回 京都大学-慶應義塾大学グローバルCOE共催シンポジウム
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000015-0020

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第4回 京都大学—慶應義塾大学グローバル COE 共催シンポジウム

「トランスナショナルな心・人・社会」 参加報告

Kyoto University and Keio University Hosted a Joint Symposium on “Transnational Mind, Human, and Society”

(1月9日 京都大学時計台記念館2階 国際交流ホールI&II)

2011年1月9日、京都大学吉田キャンパス百周年時計台記念館にて、「第4回京都大学—慶應義塾大学グローバル COE 共催シンポジウム：トランスナショナルな心・人・社会」が開催された。本シンポジウムは一般公開され、当日、会場は一般、学生等、多くの聴衆で賑わった。

まずオープニングセッションでは、「心が活きる教育のための国際的拠点」拠点リーダー子安増生教授（京都大学）から本シンポジウムの主旨が説明された。ここでは「トランスナショナル」というシンポジウム全体のキーワードについて議論された。特に国と国との関係（Inter-national）に留まらない、人と国、組織と国などの様々なレベル間の関係（trans-national）をも取り込んだこのトランスナショナルな関係をどの様に捉えていくべきかについて、本シンポジウムの全体に関わる問題提起がなされた。

その後の講演は第一部、第二部に分けて行われた。第一部では、慶應義塾大学文学部山本淳一教授の司会の下、慶應義塾大学、京都大学の両 GCOE のプロジェクトにて研究を行う若手を中心に発表が行われた。第一発表者の慶應義塾大学先端研究センター研究員佐治伸郎氏の発表は「異なる語彙化パターンを持つ第二言語の習得：日本語及び韓国語母語話者の中国語語彙習得を事例として」と題し行われた。ここでは日本語、韓国語という異なる母語を持つ中国語学習者が中国語語彙を学ぶ際、どの様に母語知識の干渉を受けるのかを実験的に調査した成果が報告された。続いて同じく慶應義塾大学先端研究センター研究員濱雄亮氏の発表は「新療法の輸入と土着化：糖尿病医療におけるカーボカウントを事例として」と題し行われた。カーボカウント療法とは炭水化物の量を調整し血糖値をコントロールするという、糖尿病における新しい療法である。日本に輸入されて日が浅いこの療法が、どのように医療関係者及び糖尿病患者に受容されていったのかに関して、綿密な実地調査の結果が報告された。第一部の最後に、京都大学教育学研究科博士課程の赤上裕幸氏による「越境する文化政策—満洲の映画教育政策を中心に—」と題された発表が行われた。ここでは昭和初期に日本本土で活発となった教育政策の一環としての映画が、その後満洲へと展開の場を移し、更に戦後日本に帰ってきて新しい文化として定着していく過程が発表された。特にここではある文化が特定の時代背景、また政策の影響の下で社会の中でどのように成熟され、またそれがどのように変容していくのかが議論された。第一部の三つの発表は発表者それぞれの専門の視点からの研究発表でありながらも、心、社会、文化それぞれの側面において国や政府を介さない人間同士のトランスナショナルな

関係がどう形成されていくのかを考える題材を提供し、聴衆との議論を深めることができた。

第二部では、京都大学大学院教育学研究科杉本均教授の司会進行の下、まず慶應義塾大学経済学部杉浦章介教授から「トランスナショナル化とパワーの変質」と題された発表が行われた。ここでは国対国、政府対政府というような従来の枠組みでは捉えることのできないような、個人対企業、企業対国、または個人対国といった、正にトランスナショナルというべき対立や協同の事例が豊富に紹介された。またそのような非対称な関係が成立する中で、今後パワーという概念をどのように取り扱っていくべきかという意義深い問題提起がなされた。続く京都大学こころの未来研究センター内田由紀子助教の発表では、「幸福感と対人関係の文化的基盤：日米比較文化研究からの視点」という題で、様々な文化圏における「幸福感」の比較はいかにして可能かという発表が行われた。上記のようなトランスナショナル化が進む社会にあって、どのようにして人間の感情や想いを捉え、評価していくことが可能かという問題意識は本シンポジウムの主旨全体に通じるものであり、会場では活発な議論が行われた。このように、第二部における二発表は、世界のトランスナショナル化の問題とより直接的に結び付いた、非常にダイナミックな観点からの議論を提供し、聴衆の深い共感を呼んだ。

本シンポジウムのクロージングセッションでは、司会の杉本均教授が世界のトランスナショナル化という巨大な問題について、それぞれの研究者がそれぞれの研究分野においてこの問題をどう捉えるかを考えていくことの重要性を説いた。本シンポジウムは、正に杉本教授の言葉通り、様々な分野の研究者が様々な視点からトランスナショナル化というテーマを考え、議論し、多くの人々と問題を共有する非常に重要な機会となったと言える。

(佐治伸郎)

On January 12, 2011, the fourth joint GCOE symposium of Kyoto-Keio University was held at Kyoto University. The title of the symposium was “Trans-national Mind Human and Society.” Five researchers each of who has different specialized field reported their latest studies and discussed how they can propose the essence of “trans-nationalization” from their own viewpoint, psychology, anthropology and economics. The symposium could propose unique and fruitful discussion to ponder over the forthcoming transnationalized world.

